

乳 がん 検 診（ 施 設 ）

動 向

本邦の乳がんは罹患、死亡率とも近年なお増加の傾向にあり、平成11年には乳がん死亡者数は8,882名で、年齢調整死亡率の推移を見ると、昭和40年代から上昇しており、悪性新生物による死亡者全体の7.7%を占めている。また50歳代という比較的若い時期にピークがあることは乳がんの大きな特徴で、壮年層の死亡の増加が目立つといわれている。この死亡率削減対策として、より効果的な乳がん検診システムの構築が急務である。さて乳がん検診は平成10年には老健法から外れて一般財源化され、平成12年4月にはマンモグラフィ併用検診法のガイドラインを厚生省が提示している。

当協会においてはそれに先駆けて、一般に行われている視触診検診法と、マンモグラフィ併用による検診法の二方式を行っており、今回は平成12年度の乳がん施設検診実績に基づき些かの考察を行う。

方法・対象

視触診法による検診では、各種団体の被保険者、その配偶者、さらに個人を対象に、一方マンモグラフィ併用検診法は希望する一般個人、一部団体を、また横浜市の施策により市内の40歳、45歳、50歳以上の女性を対象に行っている。このマンモグラフィ併用検診法では、まず乳房の二方向X線撮影（MLOとCC）を施行し、その画像を参考にしながら視触診を行い、同時に自己検査法と乳がんについての啓蒙を行っている。後日、3名の医師と4名の放射線技師によりマンモグラムを読影し、問診、視触診所見を考慮の上、要精検者を定めている。

結果・考察

平成12年度の視触診検診法による受診者総数は13,257名で11年度より489名増加し、また年齢階級別では50歳代にピークがある。発見乳がんは19名、発見率0.14%で、昨年より稍高率である。初診者は再診者の3分の1であるが、発見乳がんは前者から7名、後者からは12名であり、発見率は初診者の0.22%と高率となっている。従って初診者の一層の受診率

向上を図るべきである。また発見乳がんを年齢階級別に見ると40歳代に8例、50歳代に7例を占め前年に比して高齢者に増加傾向が伺える。検診は無自覚者からのがん発見が主眼であるが、今年度の発見乳がんのうち有自覚者が19例中7例、47%を占め、昨年の53%に対比して低下してはいるが、なお有自覚者が先ずは検診でという意識が働く傾向が見られる。病期について検討するに、19例中、早期乳がんが12例63%と高率であり、そのうち、無自覚者が9例75%を占めていることは、検診効果を発揮しているといえる。しかし、一方進行乳がんの7例のうちに無自覚者が3例あることは、更なる自己検診法の啓蒙が必要である。

経過観察中の検出乳がん症例は10例あり、早期乳がんが9例で90%と高率である。特にマンモグラフィによる石灰化像の経過からの検出例が半数の5例あり、そのうち早期がんは4例、病期ⅡAが1例である。石灰化像による検出例の増加傾向が伺われる。

マンモグラフィ併用検診法のうち、一般検診者対象群は370名と少なく、乳がんは発見されていない。

次いで今年度の横浜市からの委託による、マンモグラフィ併用法検診者は1,105名で、発見乳がんは12例、1.09%と高率である。初診者360名のうちからは発見乳がんが11例、3.06%であるが、一方再診者は745名と約2倍であるが乳がんは僅か1例である。年齢階級別では60歳代に発見がんのピークがあり、昨年に比して高齢化の傾向が見られる。発見乳がんのうち有自覚者が6例あり、また触診での異常例が11例もあり、診療外来受診の傾向である。従って早期乳がんは5例42%と低率である。また非触知でマンモグラフィが奏功した乳がんは60歳の女性で石灰化像から検出された非浸潤がんの1例のみである。以上の結果からマンモグラフィ併用検診による早期がん発見例の増加対策としては、自己検診法の一層の啓蒙活動を行い、有自覚者は即専門外来を受診するように推奨し、無自覚者並びに初診者の受診率向上を図るべきである。

関係の集計表は122～124頁に掲載